

海 峡 形 成 史 (Ⅳ)

大 嶋 和 雄 (海洋地質部)

はじめに

日本人の祖先が 何時頃 何処から 日本列島へ渡って来たかという問題は 日本人であるわれわれにとって非常に興味深い問題である。また その原日本人がどのような人類で どのような生活をしていたかなどについての資料は 地質学的に明らかにされた海峡形成史の傍証としても重要である。この日本人の祖先については 牛川原人や三ヶ日人の発見とその人類学的研究によって かなり明らかにされてきた。また その当時のヒトが使用していた石器については 数多くの報告があつて 海峡形成史を検証することが可能になってきたように思える。しかし それらの研究成果は あくまでも傍証であつて 海峡形成史は 海峡の地質学的研究によって 初めて明らかにされるものである。

地質学的には リス氷期頃(約15万年前)まで 大陸と日本列島との間には陸橋があつたと推定される。そうして その頃 大陸に生息していた周口店動物群が日本に渡来しているので 北京原人に対比される明石原人牛川原人および葛生原人は 動物群とともに陸橋を歩いて渡って来ても 何の不都合もない。しかし リス〜ウルム間氷期の下末吉海進によって 大陸と日本列島との間には 津軽 朝鮮および対馬海峡が形成されて 大陸から切断されたことは 当時の海底堆積物が 日本列島の日本海沿岸の段丘堆積物という絶対的な証拠として残されていることから明らかである。

その後 日本列島(北海道を除く)と大陸との間の海峡は 最終氷期にも陸化することがなかったので 新たに 大陸からの哺乳動物群の渡来はなくなり 大陸の動物相とは異なる 日本列島固有の動物相が形成されてきた。最終氷期に 大陸と日本列島との間に 陸橋は形成されたことがなかつたという地質学的な証拠は 筆者によって初めて明らかにされたものである。これまで最終氷期には 現海水準よりも140mもの海水準低下があつたという 世界にも例を見ない海水準変動論が わが国ではまかり通り 考古学や人類学に対しても大きな影響を与えてきた。考古学や人類学の分野では 海水準変動論に対して積極的な見解を表明できないために 洪積世末の大陸との間に形成されたという幻の陸橋を 後期旧石器時代の浜北人や三ヶ日人は歩いて渡って来た

と想像している。そうして 旧石器時代人は 海峡を渡海する必要がなかつたから 舟を持っていなかったという奇妙な結論に達している。それでは 氷期にも大陸と陸地接続が考えられない 水深500m以深の海にとり囲まれている沖繩本島から発見された洪積世人の渡来については どのようなつじつまあわせをするのであろうか。このような思考方法では 自らの専門分野の資料を基にして 日本人の祖先の渡ってきた道やその方法について解明することができないであろう。しかし このような現状の中でも 鈴木(1971)の人類学的な研究成果によって 三ヶ日人や浜北人などの洪積世人の形質は 縄文人 弥生人 歴史時代人を経て 現在のわれわれに受け継がれていることが明らかにされてきた。

すなわち 洪積世末期の後期旧石器時代人は すでに日本列島で一つの文化圏を形成し その人類学的な形質が 縄文時代人に受け継がれているということは 世界最古の土器の一つといわれる縄文式土器が わが国で発明される客観的な条件の存在したことを意味している。頭から 文化は西方から 大陸から伝来するというかたくなな妄説は 自国の文化に対する故なき卑下にすぎない。

本文では これまで発見された わが国の化石人類の遺骨と旧石器遺跡分布の資料が 筆者の海峡形成史と矛盾するか 否かを検討してみたい。

1. 日本 の 洪 積 世 人 類

ヒトは数百万年におよぶ地質時代のなかで オーストラロピテクス(猿人段階)→ピテカントロプス(原人段階)→ネアンデルタール(旧人段階)→クロマニオン(新人段階)を経て現代人に進化してきたということは いまや科学的に証明されている。わが国で これまで発見された化石人類は ピテカントロプス(例:北京原人類)に比較される明石原人や牛川原人と クロマニオン(例:周口店上洞人)に比較される浜北人 三ヶ日人 港川人および山下洞人であつて ネアンデルタールに比較される旧人は発見されていない(第1表 第1図)。

北京原人に比較される明石原人および牛川原人の化石人骨は はたして人類のものか否か いまだ論議があるようであるが 周口店動物群が日本列島に渡来していることから その存在を否定する必要はない。明石原人

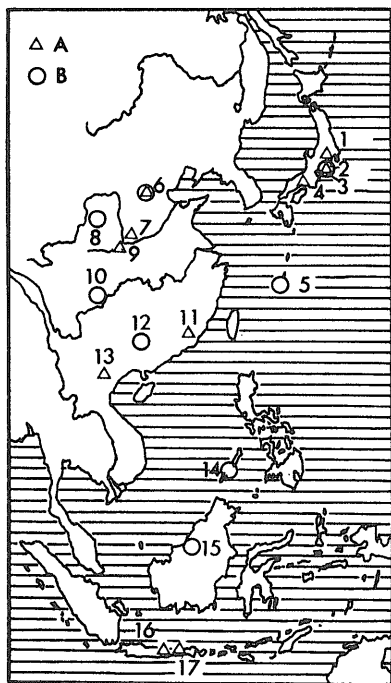
第1表 日本列島から発見された化石人類

化石人類名	発見地	発見年	発見者
明石原人	明石市大久保西八木海岸	1931	直良信夫
葛生原人	栃木県安蘇郡葛生町	1950	直良信夫
牛川原人	豊橋市牛川町忠興	1959	鈴木 尚
三ヶ日人	静岡県引佐郡三ヶ日町	1959	鈴木 尚
浜北人	浜北市市根岩水寺	1961	鈴木 尚
山下洞人	沖縄本島	1970	鈴木 尚
港川人	沖縄本島	1971	鈴木 尚

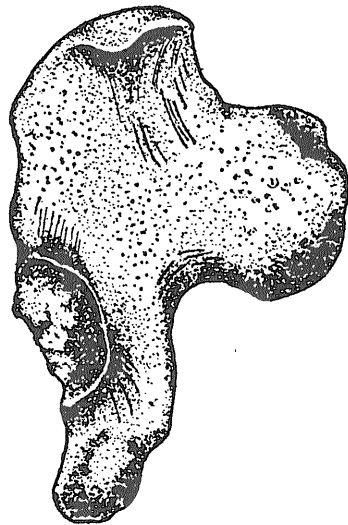
(第2図)は 直良信夫氏が1931年4月18日に兵庫県明石市大久保西八木海岸の断崖下で発見された腰骨に対して 長谷部言人博士が *Nipponanthropus akashiensis* と命名したものである。本腰骨は 1945年5月25日の戦災によって焼失してしまったが 東京大学人類学教室の長谷部教授が 直良氏から鑑定のために送付された本腰骨の写真と精巧な石膏模型を発見したことによって 初めて学問的な日の目をみた。この腰骨模型は 男性のものとなされ その形質は現生人類やネアンデルタール人類などと違って 前かがみの姿勢をとるもので しかも類人猿に似て寛骨臼が浅く 坐骨結節もせまくて短い。そのほか腰骨の上縁やその他の諸突起の発達が悪いなど 北京原人などの原人に比較される特徴がある。

人類学的に この様な特徴をもつ腰骨も 発見者がアマチュアであったことや 出土層準が明確でないことさらには わが国には旧石器文化が存在しないという学界の権威者の御高説によって この貴重な腰骨は無視されてきた。長谷部教授の指摘によって 事態を重視した学界は 学術会議に勧告して 明石西郊含化石層研究特別委員会を設置した。そうして 1948年10~11月まで現地調査を行なったが 腰骨発見から17年も経過し その発掘地点はすでに海底に没し 何の証拠も得られずに悲観的な結論が下されている。たとえば 腰骨が産出したと推定される地層からは貝類化石が発見されるが

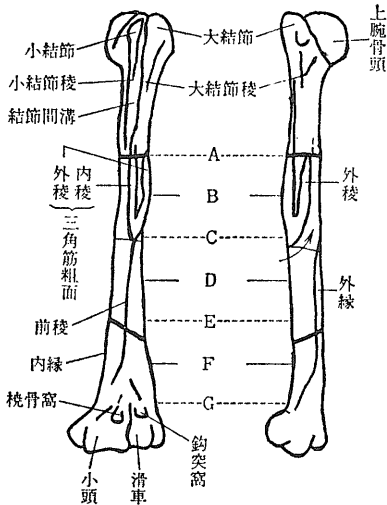
それらはすべて石灰質の部分が完全に溶脱して キチン質の被膜のみが残されている。したがって 腰骨などが定型を保って残されているはずはないという 一見科学的に思える結論である。化石採集を行なったことがある者なら 地層中では数十 cm しか離れていないのに完全な化石と溶脱したモールド(残型)しか残っていないことは ごく普通にあることを知っている。したがって 地層の局所的な化学的性質から化石の保存度についての決定的な結論は 到底出せるものではないことを 地質屋ならば知っている。それよりも 同層準から周口店動物群のナウマン象が産出することを重視し 明石原人の遺骨が発見されても不思議ではないと結論する方が 科学的であろう。そうして 問題の腰骨が 原人のものか 新人のものかの判断は 人類学や解剖学的な見地からされるべきである。産出層準から原人の遺骨か 新人の遺骨かを決定するのは本末転倒である。もし 産出した層準が新しい地層であったとしても 古い化石が新しい地層中に礫のような状態で混入すること



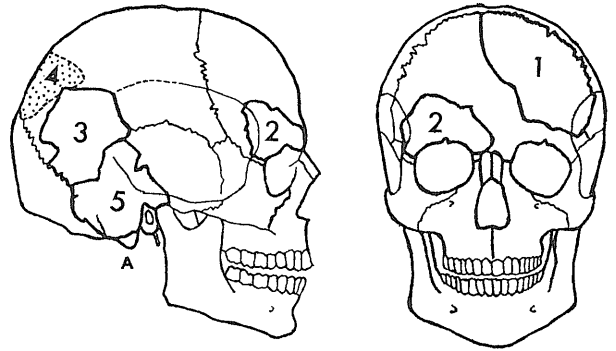
第1図 洪積世の化石人類の分布
 A 前期~中期 洪積世人
 B 後期 洪積世人
 1. 葛生
 2. 浜北・三ヶ日
 3. 牛川
 4. 明石
 5. 山下洞港川
 6. 周口店
 7. 丁村
 8. 水洞溝
 9. 藍田
 10. 資陽
 11. 馬壩
 12. 柳江
 13. ランソン
 14. 約2万年前 パラワン
 15. ボルネオ大洞窟
 16. トリニール サンギラン
 17. ンガンドン モジョケルト



第2図 明石原人の腰骨(直良信夫による)



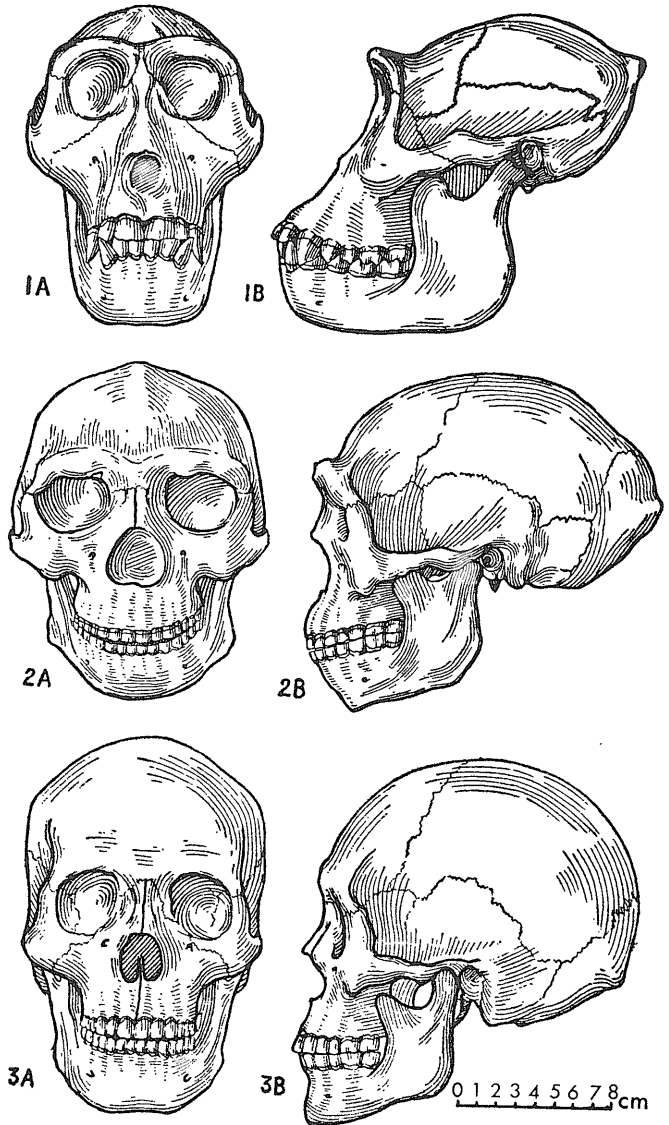
第3図 牛川人上腕骨の復原 矢印は腕骨神経溝を示す 鈴木 尚 (1963) から



第4図 三ヶ日人の頭骨 数字は発見された部分 A: 乳様突起 鈴木 尚 (1963) から

は それ程 稀なことではない。もう1つの 原人の遺骨と推定されている 上腕骨破片 (第3図) と大腿骨破片は 東京大学鈴木教授によって 豊橋市牛川町の石灰岩砕石場から発見された。同時にニホンザル クズウアナグマ ニホンムカシジカ ネズミ モグラの化石が発見され 哺乳動物化石相からは 葛生原人の発見された葛生層に対比される。したがって 中部洪積世の堆積物から発見された牛川人の遺骨は 地質学的な見地からは原人段階のもとと推定される。しかし 人類学的には 頭骨が発見されるまではどの型の人類であるか決定できないというのが妥当な見解であろう。

新人としては 三ヶ日人 浜北人 山下洞人および港川人が発見されている。これらの洪積世の人類学的形質は縄文時代人に受け継がれていることを鈴木 (1963) は詳しく言及している。その要点について 抄録する。三ヶ日人頭骨 (第4図) の側壁はほとんど垂直に立ち 疑いもなくホモ・サピエンス (新人) に特有な高い脳頭骨をもっている。乳様突起の先端 (第4図a) は欠けているが残っている部分から推定すると 外側に向かって膨隆しつつ 垂直に下垂する発達の良い突起が想定される。外耳孔の縁は薄く 鼓室板が垂直に下垂し その前面が凹彎する。



第5図 頭骨の比較図
1. ギリラ 2. 北京原人 3. 現代人 A: 前面 B: 左側面 呉汝康 賈蘭坡 (1955) から

第2表 大腿骨中央の三径と柱状示数

	矢状径	横 径	周 径	柱状示数
北京人類	25.5	29.4	85.5	86.3
ネアンデルタール人類				
スピー人	29	29	97	100.0
ネアンデルタール人	31	29.5	94	105.1
オールドス人	24.6	25	84	98.4
化石ホモ・サピエンス				
上洞人	32	28.1	95	125.6
三ヶ日人	29	24	83	120.8
縄文時代早期人				
平坂人	32	26	91	123.1
夏島人	32	24	87	133.3
現代日本人	27.6	26.3	83.7	105.4

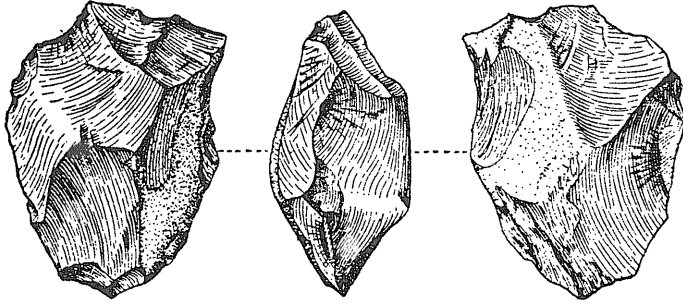
鈴木 尚 (1963) から

また 外耳孔の後上隅には よく発達した道上棘が見られるが どれもホモ・サピエンスに普通の特徴である。前頭骨には 右眼窩上部を含んでいて ホモ・サピエンスに特有な眉間 眉上弓 眼窩上縁および眼窩上平面とが区別され 原人や猿などに普通に見られるところの猿のように凸出した眼窩上隆起はない(第5図)。すなわち 頭頂骨・側頭骨・前頭骨の形質は すべて三ヶ日人の頭骨が ホモ・サピエンスに属することを示している。また 三ヶ日人の大腿骨骨幹の中央と推定される部分で 横径・矢状径および周径をはかると それぞれ 24mm 29mm および 83mm である。この矢状径と横径との比である柱状示数は 120.8 である。柱状示数が 100 を越えるものを柱状大腿骨と呼び 超過の度が著しいほど骨稜の発達がよい。洪積世から現代に至る各人類の三径と示数を比較すると (第2表) 三ヶ日人の示数値は 北京人類 ネアンデルタール人類をはるかに越え 化石の現生人類 とくに周口店上洞人やわが国の早期縄文時代人に近い値である。このような柱状大腿骨は原始的人類にはなく現生人類になって初めて獲得した形質である。この点からも 三ヶ日人は化石のホモ・サピエンスに属する。しかも この特徴は縄文時代人にほとんど常に発見されるので 三ヶ日人は縄文時代人的であるといえる。

以上のように わが国の洪積世人には 北京原人に比較される明石原人 葛生原人および牛川原人と 化石ホモ・サピエンスである三ヶ日人 浜北人 港川人および山下洞人が発見されている。しかし その中間に位置するネアンデルタール (旧人) に相当する人骨は発見されていない。この事実は 日本列島の哺乳動物化石相には 周口店動物化石相が下部葛生階に見られ 上部葛生階においては 大陸からの新しい動物相の渡来はなくなって 日本固有の動物相が形成されたという事実とよく一致している。そうして 洪積世末の花京階 (ウルム氷期) には 新しい動物相の渡来は認められないが 三ヶ日人および港川人に代表される化石現生人類の渡来が認められることは オーストラリア大陸の場合と全く同様である。アボーリジンのオーストラリア大陸への移住は 3万年前頃と推定されるが その頃に アジア大陸からオーストラリア大陸へ ワラス線を越えて移住したアジア大陸固有の哺乳動物は ただの1種もない。ヒトだけが ワラス線を越えて生活圏を拡げることができたが 泳ぎを得意としない哺乳動物は ワラス線を越えることが出来なかった。ヒトも 水牛や虎ほど泳ぎ

第3表 中国旧石器時代

地質時代 ¹⁾		絶対年代 ²⁾ 万年	中国石器時代文化分期		人類化石	相當於歐洲的文化期			
全新世 次生黄土		0.5-2.5	新石器及中石器時代		現代人				
更新世 晚 期	黃 土 期	5.0	舊 石 器	晚	山頂洞人文化	山頂洞人 荊陽人	馬格德林文化		
				中 期	「河套文化」	薩拉烏蘇河文化			
						水洞溝文化	河套人	莫斯特文化	
		10		黃土底礫層的石器					
更新世 中 期	周 口 店 期	20 30 40 50	新 石 器 時 代	初 期	山西襄汾丁村文化	周口店第3及第4地點……	山西襄汾丁村人	阿維維利文化	
						中國猿人文化	上 部 點 ? - ?		中國猿人
							周口店第15地點		
							周口店第13地點		
更新世 初 期	泥 河 灣 期	70 80 90 100							
						?			



第6図 中国で発見された最古の石核石器 約1/2。周口店 第13地点で発見 ヒウチ石製
裴文中(1955)から

が得意とは考えられないので 何等かの渡航手段を持っていたと結論せざるを得ない。同じように 氷期にも決して陸化しない 水深500m以深の海によって取り囲まれる沖縄本島に 洪積世人である港川人や山下洞人が生活していたことは 彼等は 何等かの渡航手段をもっていた何よりの証拠である。また 原日本人渡来の海路は 南方にあったことを 沖縄本島の洪積世人の遺骨は暗示しているのではなからうか。それを裏づけるように パラワン ボルネオから旧石器時代人の遺骨が次々と発見されてきている。

2. 旧石器遺跡の分布

放射性同位元素による年代決定法が確立するまでは 層序学的手法によって 産出層準の明確な旧石器群の形態的な特徴から文化時代を設定し ある特定の地域内では まったく同じか それに似かよったいくつかの石器文化は 同時代の所産である可能性が強いという推定のもとに 旧石器の形態文化は 示準化石のように 相対的年代決定法として用いられてきた。それが何時のまにか 世界文化の単一起源論と結びついて フランスの石器文化の年代は 世界標準時になるという ミニ・スカートやロング・スカートの流行と同じように考えられ 絶対視化され 笑うことの出来ない悲喜劇を巻き起している。フランスのミニ・スカートファッションが日本に空輸されて 西欧文化の流行に弱い若き女性にインフルエンザのごとき蔓延をしたのは そう遠い記憶ではない。しかし フランスと日本との間に位置する中東アジア インド 中国では 伝統的な服装が継続して着用されていたため このファッションを見ることができなかった。すなわち 同一服装流行圏内 文化圏内においては 流行した品物によって 相対的な時代決定をすることができる。しかし 一旦 圏内を離れると この服飾流行年代で 時代の細区分や対比ができないように 旧石器形態流行論でも やはり年代決定や対比ができないのは自明の理である。今も オーストラ

リア大陸の原住民が旧石器を使用し 石器を知らないからといって オーストラリア大陸だけが タイムトンネルの中に1万年間も取り残されて 絶対年代で1万年も時計が狂っているとは 誰もいわないであろう。ヨーロッパの西暦1976年は アジアでも オーストラリアでも やはり1976年である。この点を感じ違ひして アシュール文化の石器に相当する旧石器を産するので この遺跡は25~50万年前のものであるとか ネアンデルタールが作ったと考えら

れるムスティエ文化型の槍先石器が発見されたので わが国には 礫器文化から細石器文化に至る旧石器文化が一通り勢ぞろいしているなどといった本末転倒した論文が わが国では跡をたたないようである。この点について 中国の著名な先史学者である裴文中(1965)は次のように述べている。

「中国石器時代と西欧の石器時代との対比の問題について 世界の学者はさまざまな意見をもっている。しかし 基本的な対比の方法として 中国では 石器の形態の類似によらないで 地質学的な根拠にもとづいて時代対比すべきことを常に主張している。その場合にも 第四紀動物群の総体的進化の各段階を基礎とし 個々の動物種属では時代決定をしない」

すなわち 日本のように ヘミオヌス馬らしき歯化石の破片やヘラジカのツノ破片らしきものだけから 洪積世の細区分が出来るといふ錯覚には 決して落ち入らない 自国の風土に根づいた ゆるぎない唯物史観がうかがえる。系統発生や進化論に裏づけされた古生物学的年代決定法であっても まだ 多くの問題が残されている。その問題の一つは 生物の地理的分布にある。

動物は 地球上である一定時間内に 一斉に発生分布するものでもなければ 一斉に滅びるものでもない。その証拠に 各大陸や島毎に固有の動物相が発達していることが ダーウインの進化論を始めとする生物地理学的研究によって明らかにされてきた。オーストラリアやニュージーランドの哺乳動物相が 有袋類によって占められているからといって 誰も 有袋類が旧大陸で栄えた今から3千万年前の中新世の時代に 現在のオーストラリア大陸が対比されるとはいわないであろう。ましてや 石器の型式から 世界標準時を設定して 国際的な時代対比が行なえるといった考えは 地質学者や地球科学者を納得させるものではない。

日本の旧石器遺跡の研究は いまだ発見の段階にあって 確実な国際対比はもとより 国内的な対比について

も 多くの問題があるようである。しかし 土器を伴わない石器だけの遺跡が 400 ケ以上も発見されていて その中には 旧石器文化に所属するものが かなり含まれているものと想像される。石器の形態だけからは 礫器 両面加工石核石器 剥片石器 刃器および細石器と世界の旧石器時代の石器カタログにのっているものは 全てとりそろっている。そうして 日本の旧石器文化の研究方法は 日本独自の編年を確立することよりも ヨーロッパの類似の形態をとる旧石器との比較対比を行なうといった 前時代的な研究方法が主流にあるため いろんな人類の発達段階に対応した石器文化がとりそろえられている。このような混乱は 昭和21年に 相沢忠洋氏によって 桐生市の西南方約 4km の岩宿の赤土層から黒曜石（十勝石）製の石器が発見され それを基にして 昭和24年の明治大学考古学教室の本格的な発掘調査によって 初めて旧石器遺跡が確認されたという研究史の浅さによるものであって これから わが国の旧石器時代の研究成果が 体系化されるものと期待される。

地質学的に 日本の旧石器遺跡の産状で興味があることは これら日本各地から発見される旧石器は どういう訳か 立川ローム層とほぼ同年代の地層にのみ産出がかぎられていることである。立川ローム層中には 有機物に富んだ 2 枚の腐植土層がはさまれている。上位のものは第 1 黒色帯とよばれ 約 1.7 万年前の古土壌で 下位の第 2 黒色帯は約 2.5 万年前の古土壌である。したがって 日本から発見されている産出層準の明確な旧石器の大半は 2.5 万年前から 1 万年前のものである。北海道の白滝遺跡もその中に入り 後期旧石器文化に対比される。そうして 白滝型旧石器が模式地の北見地方から本州の秋田地方へ伝播するために 津軽海峡が陸化しなければならないというのが 考古学者の考えのようであるが この時代の人々（新人）が渡航手段をもっていけば 海峡を陸橋にする必要がない。われわれと同じ新人である白滝人が渡航手段を持っていた可能性を是非 考古学の立場から立証して頂きたいものである。それ以前の旧石器文化については 確実なことは判っていないが 国分直一氏によって 北九州の大型石器と大分県丹生台地の石器が 前期旧石器と想定されている。

丹生台地の石器は 形態的には海外の下部旧石器文化の礫を打ち欠いてつくり出した礫器（チョッパーやチョッピング・ツール）に似たものである。しかし 残念なことに産出層準がはっきりしていない。もし 丹生台地の石器が前期旧石器に対比されるものとしても

明石原人 牛川原人および葛生原人や その当時の周口店動物群が 日本列島に渡来しているので矛盾はない。もち論 浜北人 三ヶ日人 港川人などの新人が作成した後期旧石器遺物が 立川ローム相当層から発見されることは 今となっては当然のことである。しかし 旧人（ネアンデルタール）によって作られた石器文化が発見されていないという事実こそ注目して頂きたい。この事実こそ 筆者の海峡形成史を支持するものである。すなわち 旧人が生存していたリス～ウルク間氷期からウルク氷期初期の約 10 万年前～4 万年前には すでに日本列島は大陸から海峡によって分断され この海峡を旧人達は 他の哺乳動物同様に渡海することができなかった。この間の事情は ニューギニアやオーストラリア大陸と同様で 新人であるアボリジンの祖先が渡海するまで オーストラリアの支配者は有袋類であった。おそらく 日本列島は象や鹿の天国であったであろう。したがって われわれ日本人の直接の祖先は 現在の日本列島の哺乳動物相の大部分を構成する周口店動物群とともに渡来した明石原人や牛川原人もなければ 旧人でもない。新人である三ヶ日人 浜北人 港川人および山下洞人にこそ われわれの祖先を見る。すなわち われわれの祖先は 最終氷期に新人が全世界に生活圏を拡大する流れのなかで 舟に乗ってやって来た。そうして ナウマン象を始めとする泳ぎを得意としない哺乳動物は 陸路があった時代にも 生活圏の拡大が可能だったのである。

ま と め

わが国の旧石器文化は 原人によって形成された礫器文化と 新人によって形成された後期旧石器文化であって ヨーロッパ大陸に見られるような 旧人（ネアンデルタール）による旧石器遺跡も人骨も発見されていない。ここに 筆者は 海峡形成史の傍証を見る。旧人が出現した頃には すでに 大陸と日本列島との間には海峡が形成され 旧人たちは この海峡を渡るべき舟を持っていなかったために 日本列島へ渡来できなかったであろう。典型的な狩猟人類である旧人の渡来がなかったために 島国である本州に 世界でもかなり遅くまで（花泉階 約 1 万年前） ナウマン象が残っていたのではなかろうか。氷河期の過酷な環境を耐えぬいた後の 温暖な生息好環境において なぜ ナウマン象は滅亡したのであるのか。ここに われわれの祖先（新人）たちの狩猟と焼畑農業などの生産活動と 世界最古の土器の一つといわれる縄文式土器発明のプロローグを見る。

（未完）